四日市市平尾町

狐塚1号墳発掘調査報告

1970

日本道路公団名古屋支社
三重県教育委員会

序

東名阪道路工事にともない、三重県教育委員会では、道路敷となった11ヶ所の遺跡について、日本道路公団名古屋支社の委託により、昭和43年、昭和44年の２年度にわたり発掘調査を実施し、その結果はすでに刊行したところである。

今回、調査することになった狐塚１号墳は、その後、あらたに側道敷となり発掘調査を実施したものである。

本書の刊行にあたり、調査委託者である日本道路公団名古屋支社、東名阪道路工事事務所をはじめ、調査に協力された四日市市教育委員会および地元関係各位にはふかく謝意を表するものである。

昭和45年6月30日

三重県教育委員会
教育長　浜口佐治郎

例　　言

1．本書は、日本道路公団名古屋支社の委託により、三重県教育委員会がおこなった、四日市市平尾町・狐塚１号墳の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は、三重県教育委員会が主体となっておこない、その経費は日本道路公団名古屋支社が負担した。

3．調査には、東名阪道路工事事務所、四日市市教育委員会、大成建設株式会社・東名阪道路県作業所のご協力をうけた。また、四日市市下海老町・萩学氏、同寺方町・伊藤忠七氏には、何かとご配慮をたまわった。

4．図版１の空中写真は、神奈川県川崎市・千代田航空事業写真部のご提供による。

5. スキャニングによるデーター取り込みのため、ひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

1．調査の経過…… 1

2．位　　置…… 2

3．墳　　丘…… 3

4．内部構造…… 6

5．副　葬　品…… 7

6．結　　語…… 9

図　　版

図版1　遠　　景

図版2　石　　室

図版3　石　　室

図版4　墓　　道

図版5　副　葬　品

図版6　副　葬　品

挿　　図

第1図　東名阪道路と狐塚古墳群

第2図　古墳地形図

第3図　狐塚古墳群測量図

第4図　墳丘と石室実測図

第5図　副葬品実測図

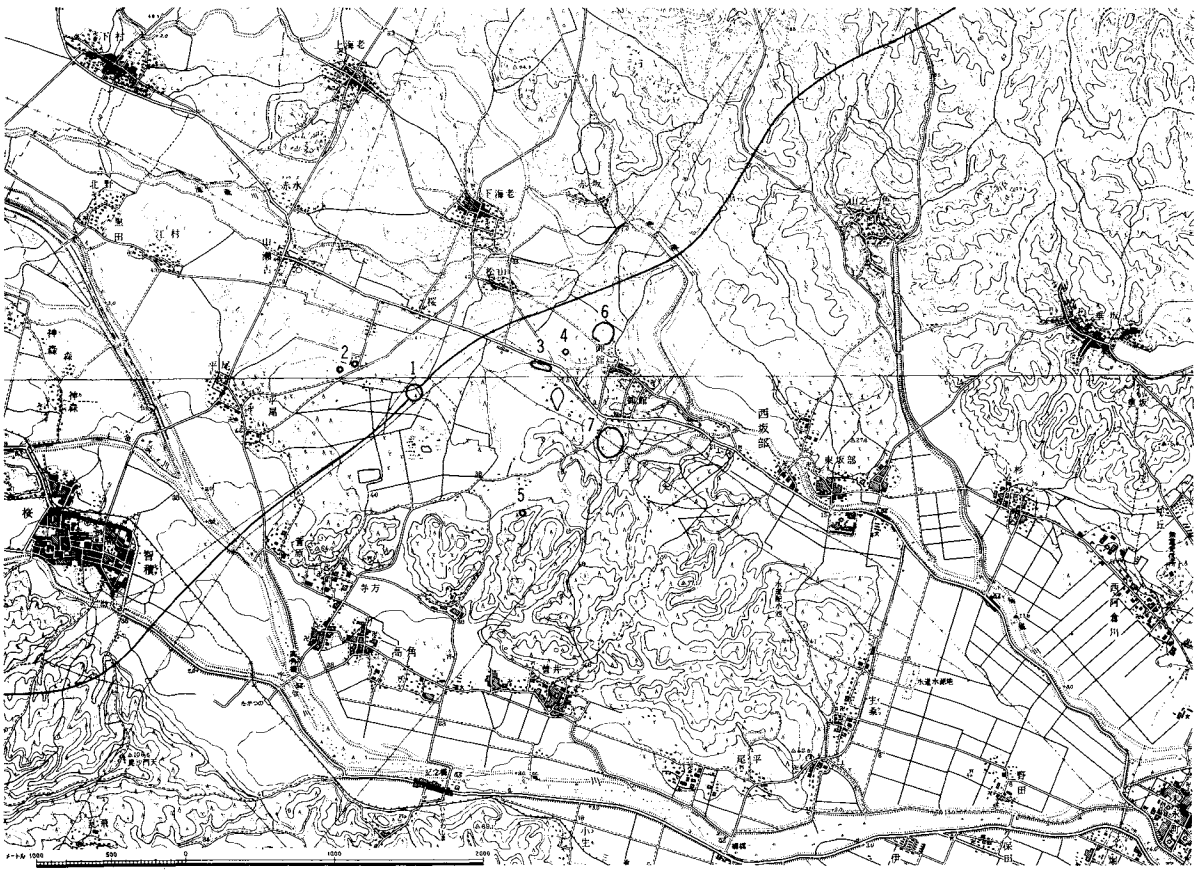
狐塚１号墳発掘調査報告

１．調 査 の 経 過

四日市の西部をしめる御館台地にある狐塚１号墳は、西側に隣接した狐塚２号墳とともに、「狐塚」として小字名ともなっていて、ふるくからしられていたものである。

狐塚２号墳は、東名阪道路敷の中央部となったため、日本道路公団名古屋支社の委託により、三重県教育委員会が昭和44年６月、発掘調査し、横穴式石室を内部構造とする古墳時代後期末の円墳であることが判明している。[1] 狐塚１号墳は、東名阪道路計画当初において、墳麓の一部だけが道路敷となるにとどまったため、保存することとなっていた。

しかし、その後、東名阪道路の工事がすすむにつれ、地元平尾地区および寺方地区のつよい要望



第１図　東名阪道路と狐塚古墳群（国土地理院「菰野」「四日市西部」１：2.5万）

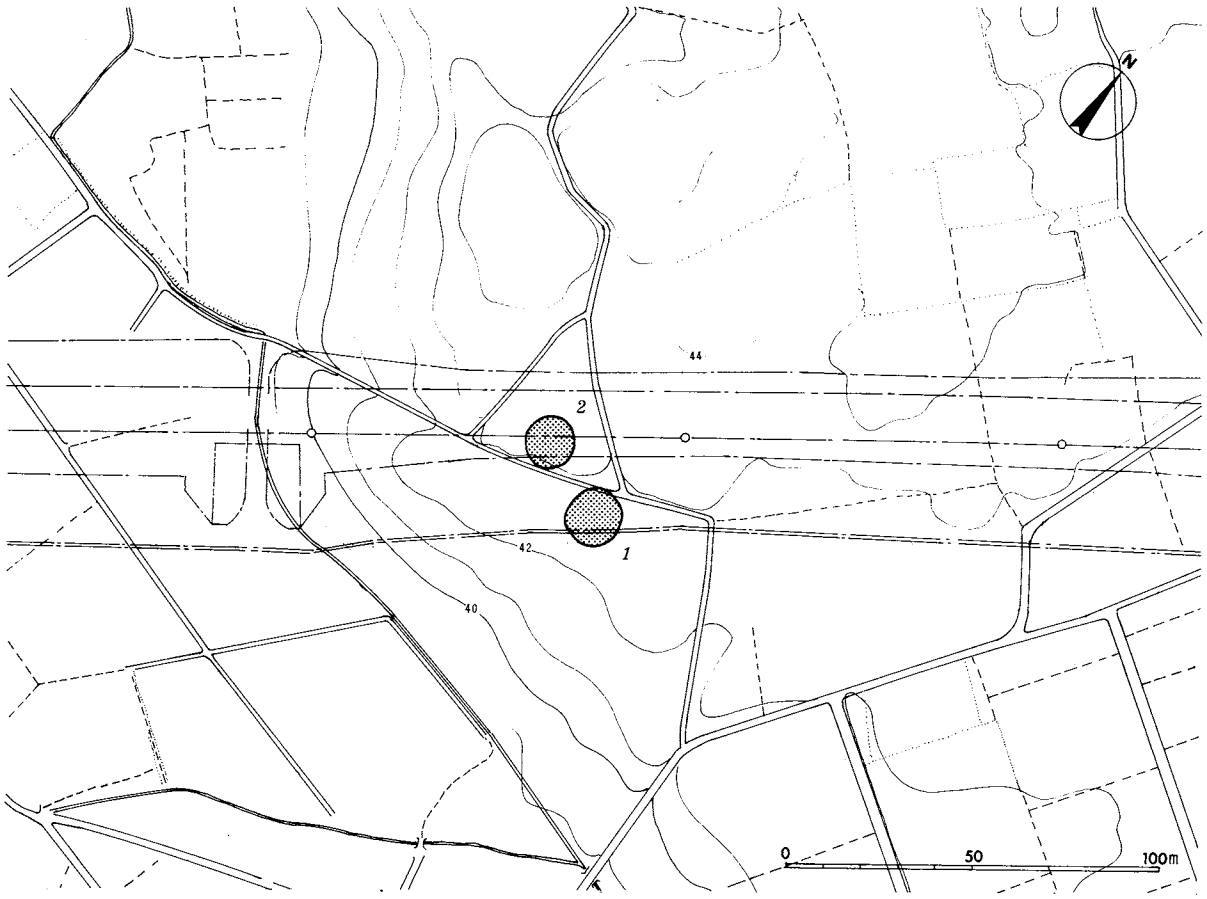
１狐塚古墳群　２ニツ塚古墳群　３御池古墳群　４足洗古墳　５尾ナシ古墳　６御館野遺跡　７山添遺跡

もあって、道路の東側に沿って側道が設置されることになり、現状のままでの保存も困難な事態にいたった。そのため、三重県教育委員会では、日本道路公団名古屋支社および東名阪道路工事事務所と協議をかさね、発掘調査することとなった。調査は昭和45年６月に実施した。

調査着手当初においては、墳丘は東西14ｍ、南北17ｍの南北にながく、全体に不整形なものであった。しかし高さとしては、北麓で80㎝、南麓で1.8ｍあり、墳丘の盛り土はよくみとめられた。墳頂には、南北に、巾３ｍ、長さ4.5ｍの範囲がかなりくぼみ、すでにほりかえされていることをおもわせた。また、墳麓には巾１ｍほどであさいくぼみがとりまき、周溝のあることがかんがえられた。

２．位　　置（第１図　第２図）

四日市西部の県（あがた）地区には、南西側の三滝川と北東側の海蔵川にはさまれた御館（みたち）台地がひろがる。この台地は標高45ｍで、ゆるやかに起伏しながら東西約３㎞、南北約1.５㎞



第２図　古 墳 地 形 図（日本道路公団名古屋支社「東名阪道路平面図１：1000」）

の範囲につづく。台地面は一帯に黒色有機質腐蝕土でおおわれている。

狐塚１号墳は、この台地のうちでも中央にあたり、南側の一段ひくい台地面にのぞむ個所につくられている。南側の低い台地面には、野口池、竜宮池、国指定天然記念物の湿地植物の群生している御池などの沼池があり、その周囲は水田として利用されている。台地の北側と東側はふかく開析された海蔵川谷低平地となり、南側は標高60ｍ～77ｍの生桑丘陵地でさえぎられているようになる。一方、西側と北西側は、三滝川谷低平地および菰野平野へとつづいている。

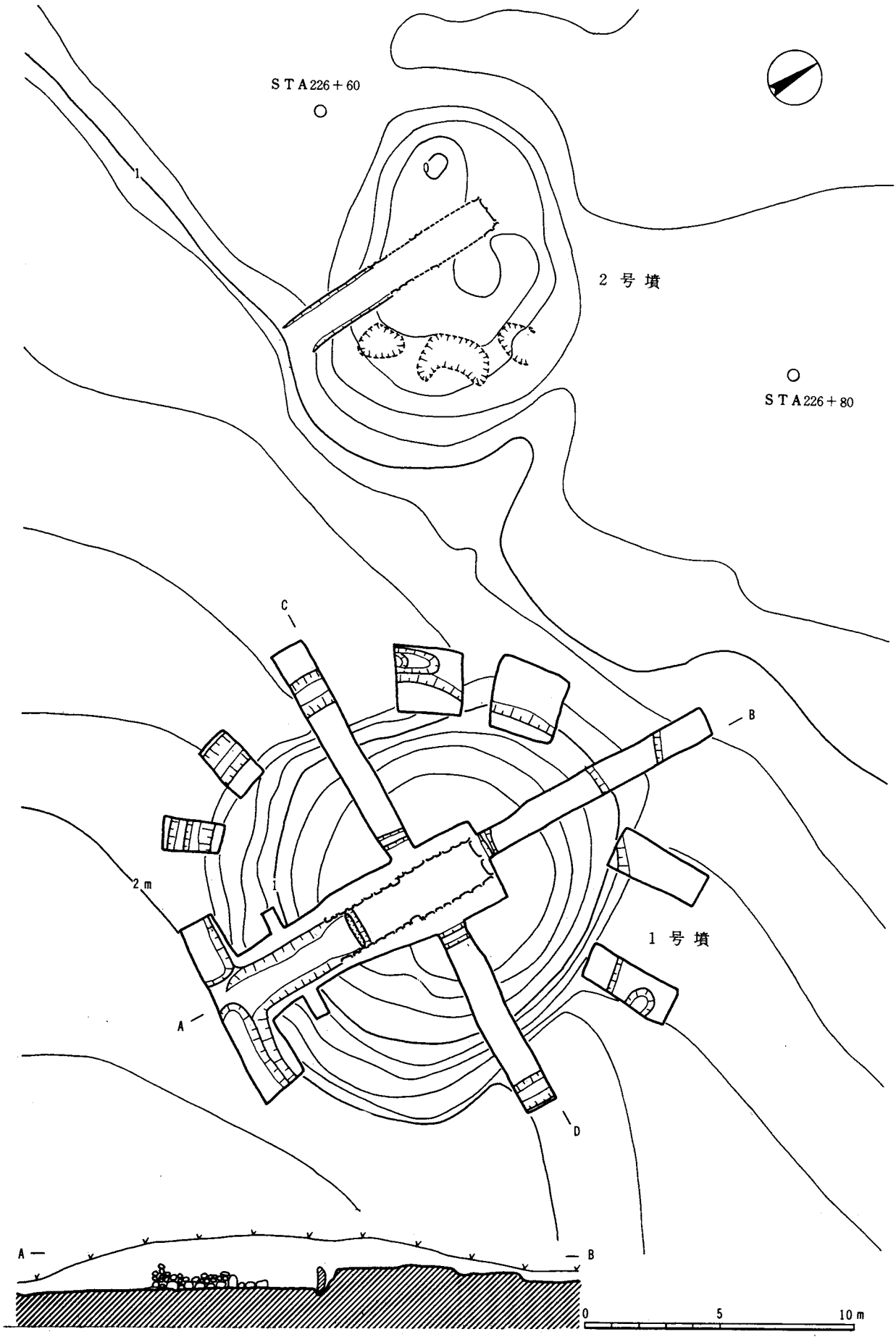
古墳のまわりは、現在、松林となっていて眺望はきかないが､南側水田面との比高が５ｍ前後で、地形的にはよく展望しうるところである。狐塚１号墳の地籍は、四日市市平尾町字狐塚の東隣になる同字長沢2869番地である。

このあたりは、四日市西部においても比較的遺跡のおおいところである。古墳としては、西方約500ｍに平尾町･二ツ塚古墳群（全２基）、東方約900ｍに西坂部町･御池古墳群（全11基）、同･足洗古墳、南東約１㎞に寺方町・尾ナシ古墳などがある。また古墳時代以降の遺跡としては、東方約１㎞に西坂部町・御館野遺跡、同・山添遺跡など、いずれも数1000㎡におよぶ遺物散布地がある。(2)

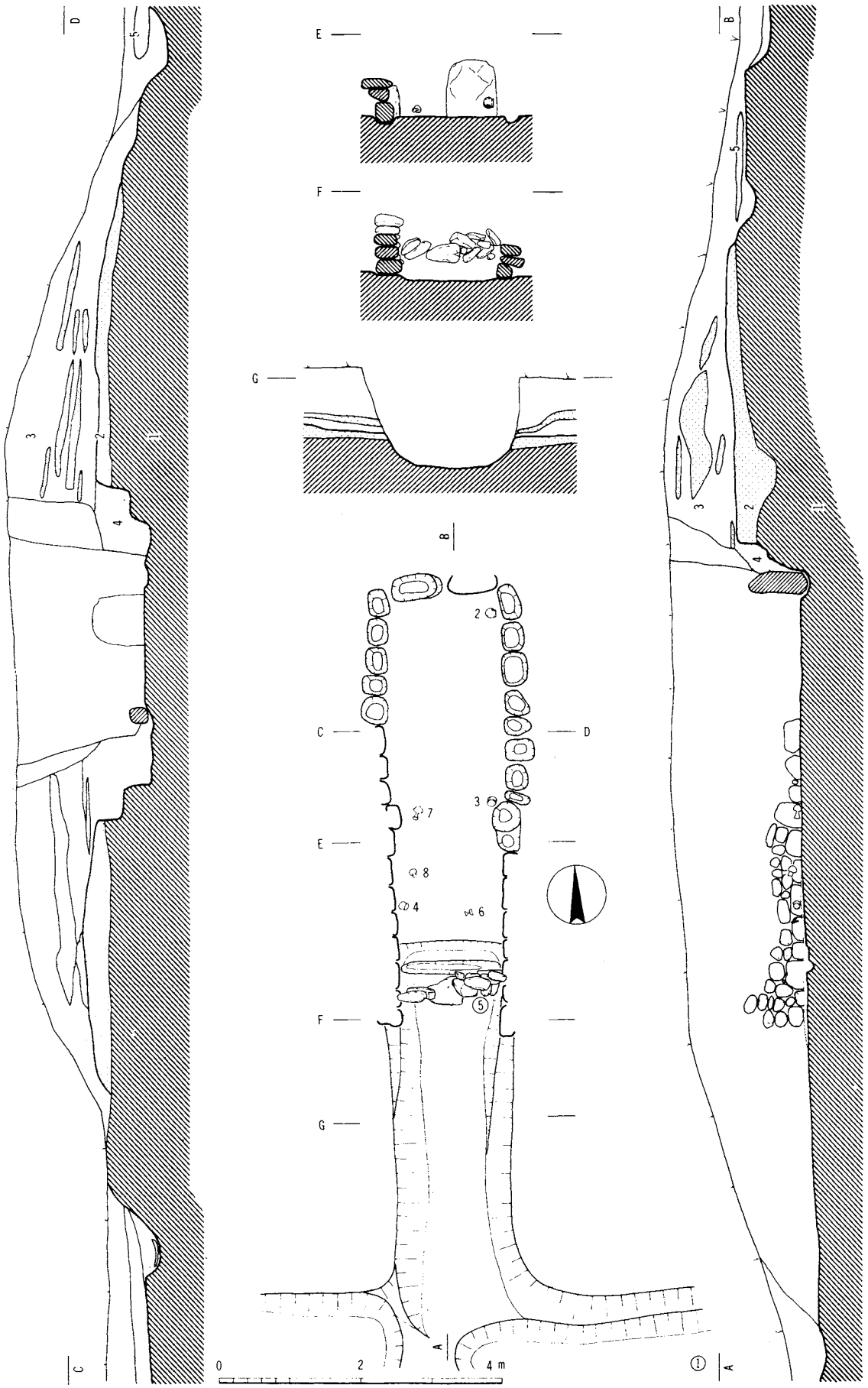
３．墳　　丘（第３図　第４図）

墳丘は、台地上でも北から南へ傾斜している地につくられている。墳麓のうち北半では検出されなかったが、南半では巾1.5ｍ前後､深さ40㎝前後の周溝がめぐる。そのうち、西側と東側では、現存の墳丘の裾から１ｍ前後外側で周溝が検出されていて、かなり墳麓が後世においてけずりこまれていることが判明した。周溝は、石室の正面にあたる所では、巾50㎝ほど、掘りのこされていて、出入口状となっている。周溝の検出されなかった墳麓の北半では、墳麓にあたる個所が、地山砂礫層とこの上に堆積している黄色土層に掘りこみがみとめられた。こうした状況から、墳丘の直径は16.5ｍとかんがえられる。

封土の築成としては、築成当時の地表面とかんがえられる黒色有機質腐蝕土層（第４図、２）の上に黄色土（同、３）を主として、黒色有機質腐蝕土を、交互に堆積している。墳麓の周囲はかな



第3図　狐塚古墳群測量図（STAは道路中心杭）



第4図　墳丘と石室実測図

りひろく、地山砂礫層にいたるまでほりさげられていて、これらが封土として使用されていることがわかる。石室の床面から現墳頂までは、高さ1.8mほどある。

周溝のうち、南東麓からは土師器甕（第５図、１）が、１個体分ほどの破片となって出土した。

４．内部構造（第４図）

内部構造は、南側に開口した横穴式石室である。その長軸は２号墳と同様、ほとんど南北をさす。墳麓から石室入口までは、素掘りの墓道がつづく。

石室は全長６ｍで、中央において側壁から15cmほど内側へせりだしておかれた比較的ながい石材によって、前室と奥室とに区画された複室形態のものである。構築に使用された石材はほとんどすでに撤去されていた。奥室では、奥壁基底部の片側と、左側の基底部の石以外は、まったくもちさられていた。撤去された個所では、石材の抜取り痕から平面をしることができた。抜取り痕は、奥壁の片側が径40cm×70cm、深さ20cm、奥室と前室とを区画する個所のうち右側のものが径40cm、深さ30cmで、ほかは径30cm×40cm前後、深さ10cm前後である。残存している石材は、黒雲母花崗岩で、しかも河川の転石の利用をおもわせるように角丸のものである。

石室は、旧地表面とおもわれる黒色有機質腐蝕土層から、地山砂礫まじりの黄色土層まで、深さ80cmほどほりこまれたなかにつくられている。この掘り方は巾4.6mで、長さは石室よりやや長く6.8ｍと思われる。床面はかたい砂礫まじり黄色土である。掘り方と側壁とのあいだは、黒色有機質腐蝕土まじりの黄褐色土（第４図、４）で、かたくうめられている。

奥室は、長さ３ｍ。巾は前室よりややひろく1.7mで、中央でごくわずかに外側へはる。奥壁の基部は、２枚の大形の石材が使用されている。そのうちで残存している右側のものは、70cm×80cm、厚さ30cmのおおきさのものである。

前室は、長さ３ｍ。巾は1.5m～1.35mで、奥から入口へむかってわずかにせまくなる。入口には床面から25cmほどうえで、閉塞石が１段～３段のこっており、この内側には、巾20cm、深さ15cmの仕切り状の溝がある。

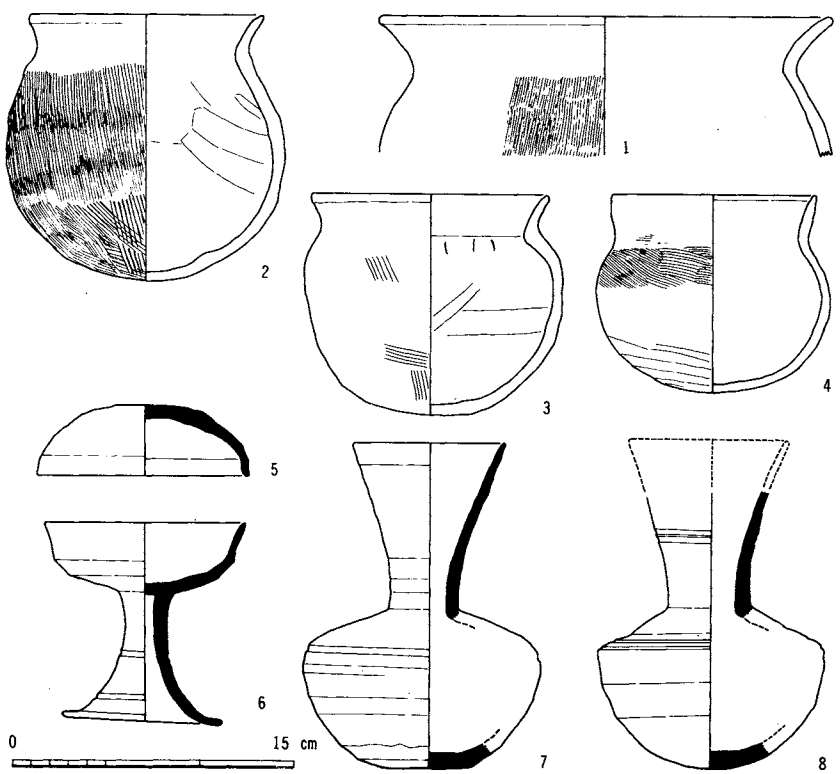
墓道は、巾1.6m、長さ4.2mで、南側墳麓から前室入口にいたる。素掘りのままで、石材をもちいていない。全体に黒褐色土ないし黄褐色土でうめこまれていた。この埋土は、攪乱された様子もほりかえされた形跡もまったくみとめられなかった。床面は石室入口から墳麓へむかって、しだいに傾斜している。遺物は出土していない。

5．副　葬　品（第5図）

石材撤去の際にかなり石室内部も攪乱されたのか、土師器・小形甕3個、須恵器・杯蓋1個、高杯1個、長頸壺2個と、少量の須恵器片にとどまり、装身具類、武具類は発見されなかった。

配　置

のこされた副葬品は、奥室にはすくなく、大半のものが前室にある。奥室では、奥壁に接して土師器甕（第5図　2）があり、前室とのさかい石に接して、右に土師器甕（同・3）、左に須恵器長頸壺（同・7）がおかれていた。前室では中央右に、須恵器高杯（同・6）左壁寄りに、土師器甕（同・4）と須恵器長頸壺（同・8）があった。このうち奥壁寄りの土師器甕と前室中央左寄りの須恵器長頸壺は、床面から10cmほど上にあるが、ほかは床面に密着していた。また、須恵器高杯の杯部は破損し、破片がまわりに散在していた。須恵器杯蓋（同・5）は、石室入口の閉塞石の下および周囲に破片として散在していたものである。



第5図　副葬品実測図

土　師　器

甕（1—4）　1は墳丘北東麓の周溝中から出土したもの。口縁部径24cm。器表は風化してほとんど剝離。肩部はたてにこまかいはけ目で調整。胎土に砂粒をふくむ。

2は、口縁部径12.5cm、高さ14.3cm。胴部は中ほどに最大径をしめす。口頸部はていねいに横なでされ、肩部から底部へはたてにはけ目調整。このはけ目は、上半はこまかいものであるが、下半から底部はあらい目をなす。内面はあらくななめにへら削りされる。胎土には細砂粒をわずかにふくむ。

3は、口縁部径11.5cm、高さ12cm、体部は肩部に最大径をしめす。器表は風化していて剝離がひどい。口頸部は雑に横なで調整。胴部はあらいはけ目の上をなで調整されるが、凹凸がのこる。底部の調整は器表が磨滅していて不明。内面はあらくへら削りされる。底部と肩部には大きな黒斑がある。胎土に細砂粒をふくむ。

4は、口縁部径11cm、高さ10.5cm。胴部は中位に最大径をしめし、口縁部はほとんど直口状をなし、端部内側にはあさい沈線をめぐらす。口頸部は横なで調整。肩部はよこにはけ目調整。底部はへら削りされる。内面はていねいになでて仕上げられている。胎土に細砂粒をわずかにふくむ。

須　恵　器

杯（5）　口縁部径11.5cm。高さ4cm。器表は内外とも水引きされるが、天井部の切離しは雑。また胎土に砂粒がおおくふくまれていて、器表の仕上りは雑となっている。

高杯（6）　無蓋のもので、杯部径10.5cm、高さ11cm～10.5cmで全体にかたむく。杯部、脚部とも水引きは比較的ていねい。杯底部はへら削りされる。脚部は中ほどと下方にあまい沈線が一条ずつめぐらされる。胎土には細砂粒を比較的おおくふくむ。

長頸壺（7—8）　7は、口縁部径8cm、胴部径12.5cm、高さ17.4cm。肩部に1条の沈線をめぐらす。全体にていねいに水引きされ、底部はへら削りされている。胎土には細砂粒をおおくふくむ。片面にはあめ色の自然釉の剝離がみとめられる。

8は、口縁部が欠損している。胴部径12cm、現高15cm。頸部から胴部は全体に水引きされるが、底部はへら削りされている。頸部中ほどと肩部には、それぞれ2条ずつ沈線をめぐらす。器表には

濁緑色の自然釉があつくみられるが、一部剝離している。胎土には細砂粒をおおくふくむ。

この他、器壁はうすいが器表にむしろ目、裏面に同心円のたたき目のある須恵器の破片、山茶椀の口縁部の破片も出土している。

6．結　　語

狐塚１号墳は、石室石材の抜取りによってかなり変形され、また内部も同時に攪乱されていたが、２号墳とともに、この地域の一時期の古墳の姿をあきらかにすることができた。

内部主体は複室形態の横穴式石室で、員弁郡大安町・南林３号墳、四日市市平津町・八幡古墳、同西坂部町・御池５号墳、同小山田町・和田平２号墳などとともに、北伊勢の古墳の一つの特徴をしめしている。石室の形態としては、名古屋市守山区・山の田古墳、同・東谷26号墳、豊田市・来姓４号墳、岡崎市・岩津２号墳、同・天神山６号墳など、尾張、三河地方の古墳にも共通したところがあって、北伊勢地方がかなりそうした地域とのつながりをもっていたことが指摘される。石室構築に使用された石材の大小の差はあるが、石室の平面形、とくに側壁面から内側へせりだしておかれた「さかい石」「柱石」によって前、後二室に区画されることは、まったく共通している[5]。

墓道は、墳丘外から石室＝墓室に至る通路であるが、石室内への埋葬終了後うめこまれたものである。狐塚１号墳では、石室内の攪乱のため、追葬はあきらかでないが、たとえ追葬がおこなわれたにしても、その時点においては墓道はうめこまれず、石室の入口だけが閉塞されたようにおもわれる。その後、埋葬がおこなわれなくなった段階で、石室の入口とともに墓道全体もうめられたのであろうか。これは、墓道の埋土に再度のほりかえしがみとめられないこと、石室の入口の閉塞石が、床面からかなり遊離していることなどから想定されることである。

また、墳丘中央に石室がうめこまれ、墳丘外から石室入口の間に墓道がもうけられることも、北伊勢の古墳の一つの特徴である。前記、御池５号墳、狐塚２号墳、和田平１号墳、同２号墳、および鈴鹿市国府町・保子里18号墳[6]など、いずれも墓道がもうけられている。

副葬品として武具類および装身具類は、ともなわないか、あるいは攪乱によってうしなわれたに

しても、ごく少量にとどまっていたのであろう。土器類にしてもすくない。おなじ小規模な石室の御池5号墳においても武具類は刀装具と刀子にとどまり、また和田平1号墳のように多量な土器類と装身具類を副葬しながら、武具類のうち刀類をかいていることなど、被葬者の階層を反映しているとおもわれる。副葬品への一つの規制のあったこともかんがえられる。

古墳の築造時期としては、副葬品のうちでも須恵器の形態が「浅井型式」に比定されること、横穴式石室の形状ともかんがえあわせ、7世紀前半代とおもわれる。2号墳の築造時期とあまり差はないようである。　　（小玉道明）

註

(1) 三重県教育委員会「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」　1970

(2) 三重県教育委員会「三重用水農業水利事業地域遺跡地図」1970

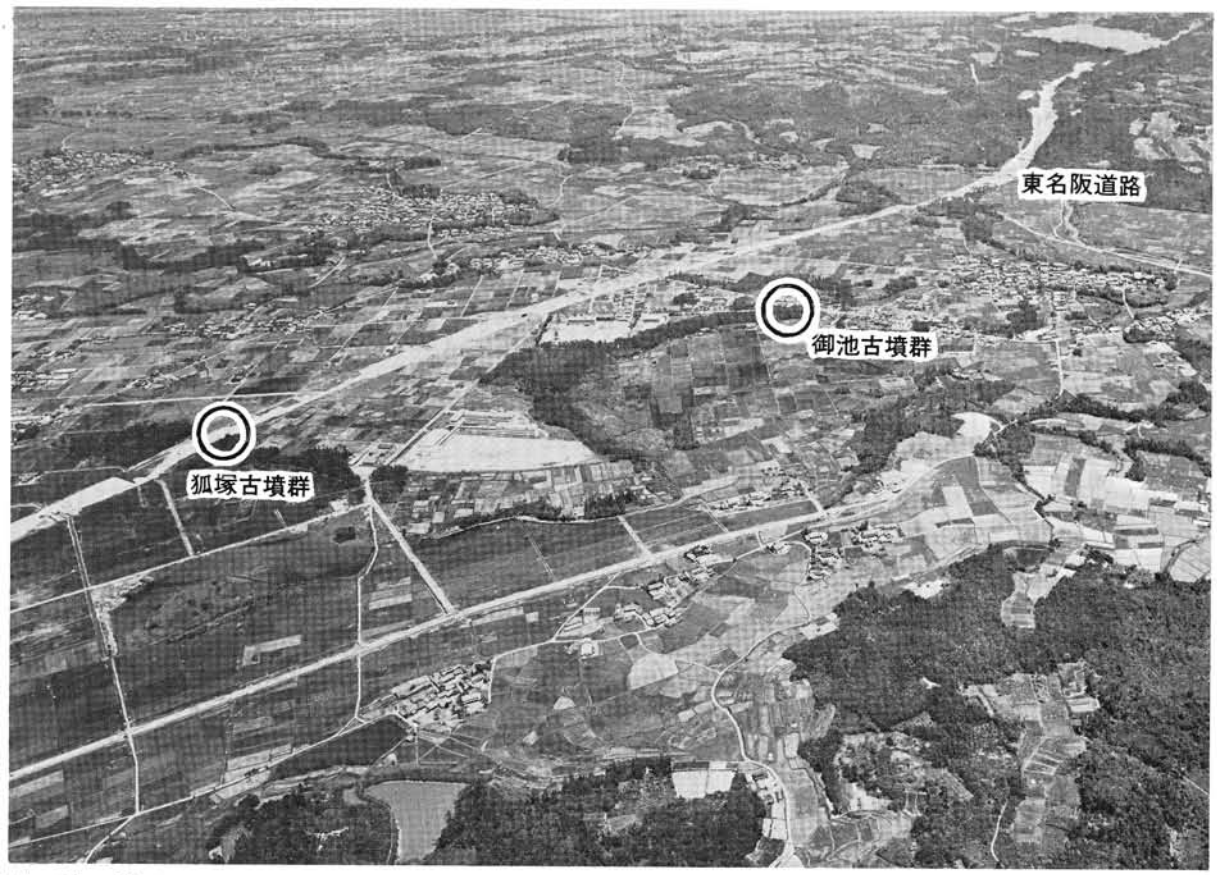
(3) 「墓道」. は墓域内において個々の古墳にいたる参道を想定して呼称される場合もあるが（水野正好他「甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要」滋賀県教育委員会　1968）、ここでは、浜松市半田山B群5号墳における呼称と同様の意味でもちいる（向坂鋼二他「浜松市半田山古墳群調査記録」Ⅰ　浜松市教育委員会　1970）。また、「前溝」とも呼称されている（増井義己「藤枝市瀬戸古墳群発掘調査概報」日本道路公団・静岡県教育委員会『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　1968）。

(4) 員弁高校郷土研究部「伊勢国石榑村南林第3号古墳調査概報」『猪名部』総輯篇2
四日市市教育委員会「御池第5号墳発掘調査概要」　1965
四日市市教育委員会「和田平古墳群発掘調査概要」　1964

(5) 久永春男、内山邦夫編「守山の古墳」守山市教育委員会　1963
七原恵史、横井在時編「守山の古墳—調査報告2」　名古屋市教育委員会　1969
大橋勤、斎藤嘉彦他「愛知県岡崎市岩津古墳群」　岡崎市教育委員会　1964
大橋勤、斎藤嘉彦他「岡崎市天神山古墳群」　愛知県立岩津高校　1969
複室形態の石室の祖形を大陸および朝鮮半島にもとめ、その伝統を継承しているものとかんがえられている（池上年「石室古墳の東漸と三室横穴式石室の消長」『天神山古墳群』　1969）。

(6) 仲見秀雄、真田幸成「保子里第18号墳発掘調査報告」『神戸史談』4　神戸高校郷土史研究クラブ　1964

図　　版

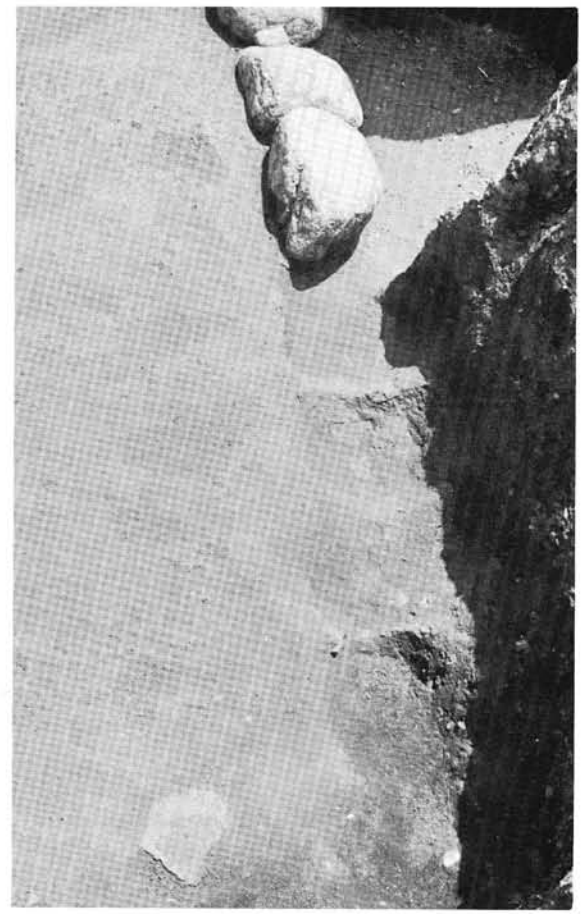


(1)　遠　望（南方上空から・千代田航空事業写真部撮影）

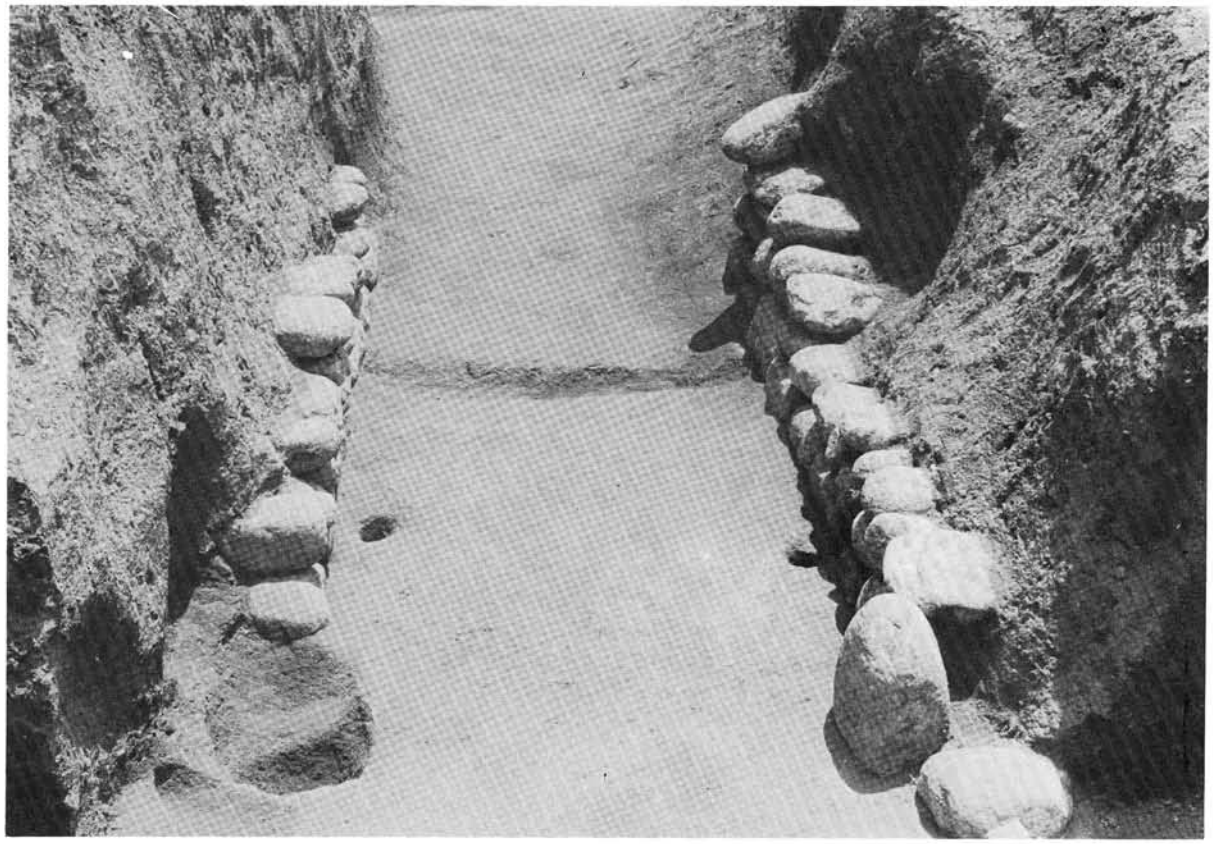
(2)　全　景（北から）

(1)　全　景（南から）

(2)　石材抜取り痕（東側側壁・北から）



(3)　石材抜取り痕（西側側壁・北から）

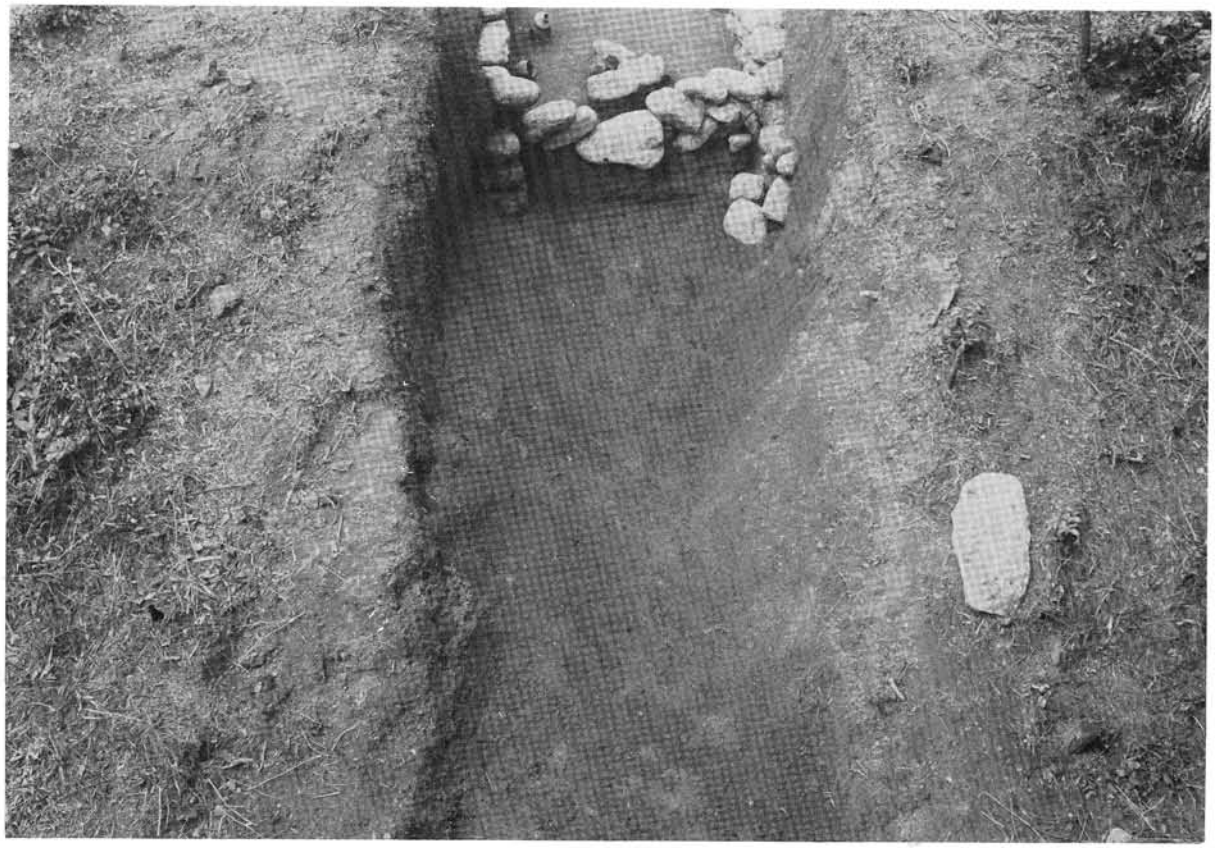


(1)　前室入口仕切り溝（北から

(2)　前室入口仕切り溝（西から）

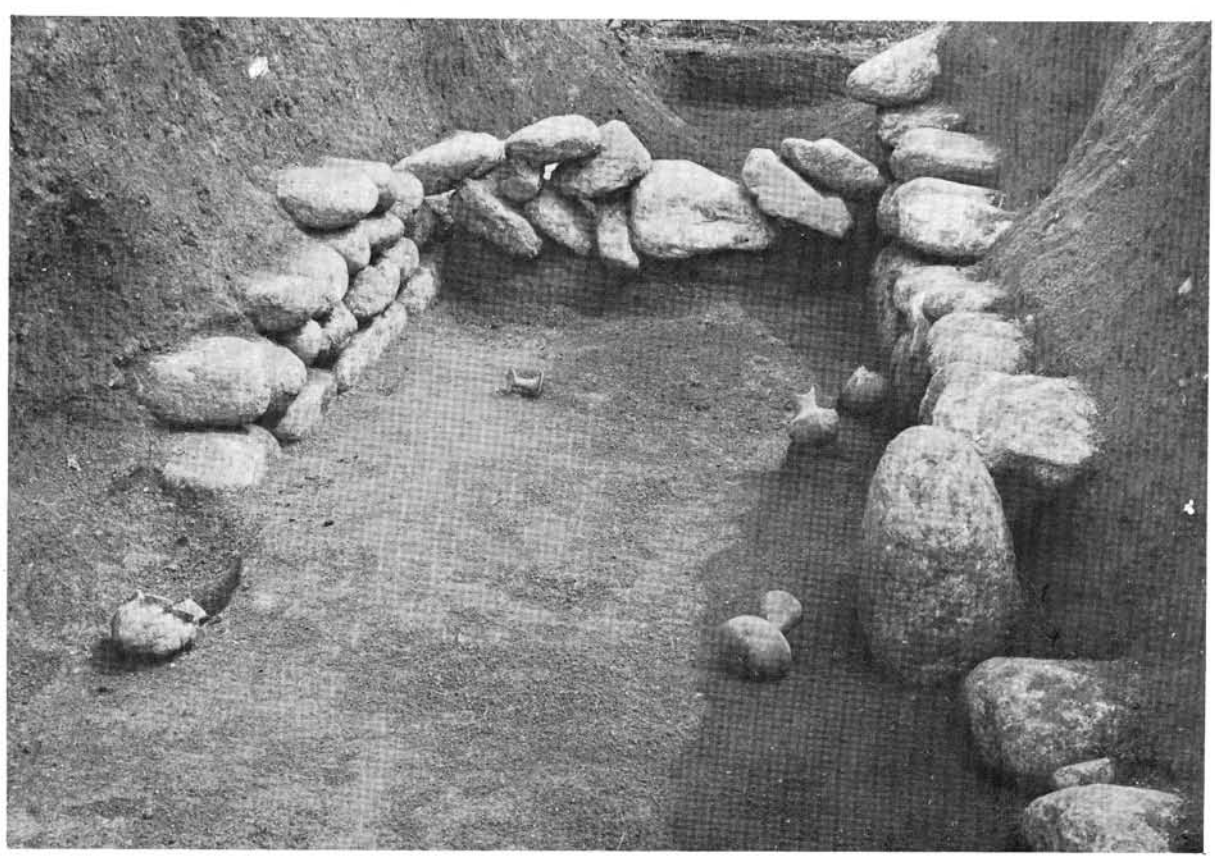
墓道

(1) 墓道（北東から）



(2) 墓道と石室入口の閉塞石（南から）

(1) 副葬品の配置と石室入口の閉塞石（南から）



(2) 前室の副葬品出土状況（北から）

2

3

4

5

6

7

8

三重県埋蔵文化財調査報告

第１集　鳥羽志摩地区遺跡地図

第２集　三重用水農業水利事業地域遺跡地図

第３集　青蓮寺開拓建設事業地域遺跡地図

第４集　三重県遺跡地図・1969年版

第５集　東名阪道路埋蔵文化財調査報告

第６集　狐塚１号墳発掘調査報告

三重県埋蔵文化財調査報告　6

狐塚１号墳発掘調査報告

1970年6月30日

編　集　日本道路公団名古屋支社
三重県教育委員会

発　行　三重県教育委員会

印　刷　津市栄町二丁目
東亜印刷有限会社

昭和45（1970）年６月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。